中日理論言語学研究会第40回記念大会
国際フォーラム2015
同志社大学

複合動詞における非対称性と日本語の膠着性

影山太郎

2015年１月11日

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

１．はじめに

形態論的言語類型 (Morphological typology of languages)

August Schleicher, Wilhelm von Humboldt, Edward Sapir

- Isolating languages
  孤立語，分析的言語（中国語など）
- Agglutinative languages
  膠着語（日本語など）
- Inflectional languages
  屈折語（ラテン語など）
- Polysynthetic languages
  抱合語，複統合的言語（アイヌ語，アメリカ先住民言語など）

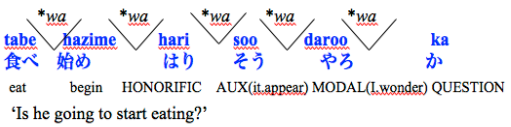
- **膠着語**
  語中で内容Mと関係Rの部分が識別できる言語。実質的意味を表す独立の単語あるいは語幹に文法的意味を表す付属的形式が接合される。（小泉保「言語類型論」，『国語学大事典』1980，東京堂）
- 述語の領域
  （むりやり） 来 - させ - られ - ない

名詞の領域
10月 - あたり - から - が （牡蠣の季節だ）

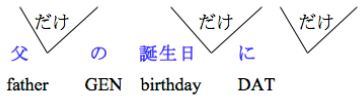
しかし，述語の領域と名詞の領域は 本当に 対称的(symmetric) だろうか？

膠着性に関する述語領域と名詞領域の非対称性

◎ **述語の領域**では，基本的に，形態素と形態素の間が密接的に融合していて，副助詞などで分断できない。言い換えると，**膠着（密着）の度合いが大きい。**



◎ **名詞の領域**では，基本的に，形態素と形態素の間が密接的に融合しておらず（服部四郎の「附属語」），副助詞などで分断することができる。言い換えると，**膠着（密着）の度合いは小さい。**



膠着性と Finiteness（定形）

今日のポイント

- **述語領域と名詞領域における形態的な膠着性の非対称性が複合動詞の生産性と関連している。**

- **述語の領域**では，主動詞に加えて，時制，アスペクト，モダリティなど，文の Finitenessを決定する要素が重要な位置を占める。この領域に関わる複合動詞（具体的には，動詞のみで構成されるＶ＋Ｖ複合動詞）は，日本語で**生産性が高い**。

- 他方，複合動詞でも**名詞の領域を含む定形動詞**（具体的には，「手間-取る」のようなＮ＋Ｖ複合動詞）は，日本語で**生産性が低い**。

日本語の膠着性を複合動詞の観点から探ってみる。

２種類の複合動詞

A．動詞連用形＋定形動詞（V+V compound verbs）

「呼び止める」や「降りかける」のように，複合語の前部も後部も動詞で構成される。

☞ 述語のみの領域であるから，日本語では非常に生産的であると予想される。

B．名詞＋定形動詞（N+V compound verbs）

「目覚める」，「指さす」のように，複合語の後部は動詞，前部は名詞（項や付加詞）で構成される。

☞ 述語に名詞がくっついていて，名詞の領域に入るから，日本語では生産性が高くないと予想される。

➢ **A, Bの違いは，言語類型論的な分布の違いに反映される。**

Aタイプ「V+V複合動詞」はアジアの諸言語（膠着語）に多く見られ，他方，Bタイプ「N+V 複合動詞」は複統合型言語に多く見られる。

２．２種類の語彙的なV+V複合動詞

● **主題関係(thematic relations)を表す複合動詞**

項関係は基本的にV2（後部動詞）が決定し，V1（前部動詞）はそれを何らかの意味で修飾するタイプ

・「踏みつぶす」＝踏んでつぶす
　あなたはゴキブリを<u>踏みつぶした</u>のですか？
　はい，つぶしました／#踏みました。

・「歩き疲れる」＝歩いて疲れる
　<u>歩き疲れた</u>ましたね？
　はい，疲れました／#歩きました。

・「取り出す」＝手に取って外に出す
　あなたはカバンから書類を<u>取り出した</u>のですか？
　はい，出しました／#取りました。

［参考］影山太郎　2013 「語彙的複合動詞の新体系」，『複合動詞研究の最先端』ひつじ書房

● **V2が語彙的アスペクト(Aktionsart)を表す複合動詞**

項関係は基本的にV1（後部動詞）が決定し，V2（前部動詞）はV1の事象に対して何らかの語彙的アスペクトを補足するタイプ

・「呆れ返る」≠呆れて返る，≒（?ひっくり返るほど）非常に呆れる
　彼の発言には<u>呆れ返りました</u>ねえ？
　はい，本当に呆れました／*返りました。

・「誉めちぎる」≠「誉めてちぎる」，≒最大限に誉める
　評論家たちは，彼を<u>ほめちぎった</u>のですか？
　はい，すごくほめました／*ちぎりました。

・「逃げ出す」≠「逃げて出す」，≒隙を見て（監視を逃れて）逃げる
　ワニが檻から<u>逃げ出した</u>そうですね？
　はい，逃げました／*出しました。

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

- **2759語のV+V複合動詞オンラインデータベース**
  影山・神崎・赤瀬川「**複合動詞レキシコン Compound Verb Lexicon**」
  英語，中国語（繁体字，簡体字），韓国語対訳付き。

国立国語研究所ウェブサイト
http://vvlexicon.ninjal.ac.jp

9

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

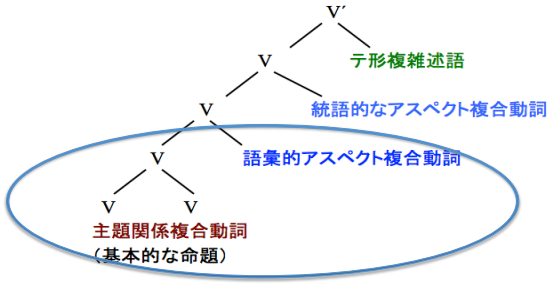
- 主題関係複合動詞は，1651語（約60%）
- 語彙的アスペクト複合動詞は，836語（約30%）

- **語彙的な複合動詞の中にも，V2が，文字通りの意味からアスペクト的な意味に文法化されているものが多数存在することは日本語の特徴**と言えそうだ。韓国語ではごく限られているようであるし，ほかのアジア言語でも報告されていない。
（2013年12月，国立国語研究所国際シンポジウム「日本語およびアジア諸言語の複合動詞・複雑動詞」）

12

複合動詞･複雑述語の階層

・２種類の語彙的複合動詞は，統語的な複合動詞やテ形複雑述語とつながり，より複雑な述部を形成する。これが膠着型言語の特徴。



➢ 膠着語の特徴は，finiteな述部の領域において動詞・補助動詞・助動詞の複雑な連鎖を生産的に作ること。

➢ 複雑な述語であっても，その中に名詞が介入すると，生産性（膠着性）は低くなる。

このことを，N+V型の複合動詞・複合述語を使って検証する。

「名詞抱合」と「動詞抱合」の非対称性

・名詞抱合(Noun Incorporation ; N+V型の複合動詞)は複統合型(polysynthetic)言語に多い。

Mohawk (Baker 1996: 12)

a. *Wa′-k-hninu-′* *ne* *ka-nakt-a′.* (文構造)
FACT-1sS-buy-PUNC NE Ns-bed-NSF
'I bought the/a bed.'

b. *Wa′-ke-**nakt**-a-hninu-′.* (名詞抱合)
FACT-1sS-**bed**-Ø-buy-PUNC
'I bought the/a bed.'

・ 他方，Ｖ＋Ｖ型の複合動詞（いわば動詞抱合）は日本語を始めとする膠着型言語に多い。

３．時制屈折をするＮ＋Ｖ複合動詞

日本語でも，
「**名詞＋時制付き動詞**」の複合動詞は存在する。

・ a. 彼はベンチに **腰をかけた**。（格助詞が付いている）
b. 彼はベンチに［**腰かけた**］。（格助詞がなく一語のアクセントだから，名詞抱合と認められる）

・ a. **色が褪せた**ジーンズ
b. ［**色褪せた**］ジーンズ

・ a. 彼は **精を出して** 働いた。
b. 彼は［**精出して**］働いた。

注意
複統合型言語の名詞抱合と同様に，全体が動詞として屈折することが重要。
これに対して，「貸し借り（する）」，「耳打ち（する）」のように，全体が名詞になっているものは，名詞抱合とは呼ばない。

・日本語にも名詞抱合に似た現象があることを
どのように扱えばよいだろうか？

Sapir (1911) The problem of noun incorporation in American languages.
名詞抱合はアメリカ先住民言語の特徴
Baker (1996) *The Polysynthesis Parameter*.
Noun Incorporation is a salient feature of *polysynthetic* languages.
（名詞抱合は複統合型言語の特性である）
Kroeber, A. L. (1911) Incorporation as a linguistic process. *American Anthropologist* 13: 577–584.
NI is *not entirely peculiar to certain types of languages* or distinctive in kind, but shares some properties with better studied types of compounds.
（名詞抱合は特定の言語タイプだけに特有というより，複合語一般と性質を共有する）

☞ **今日のポイント**
以下では，日本語の名詞抱合に似た現象（すなわち，N＋V）を幾つかのタイプに分類し，見かけの形態は**「N＋V」であっても，時制などの有無（finiteかどうか）によって生産性が異なる**ことを述べる。

複統合型言語の名詞抱合は，
テンス・アスペクトが付いた動詞の中で起こる。

➢日本語でも，たとえば「旅にたつ」に対応する「旅だつ」は，
一連の活用（屈折）を示すから，名詞抱合に似ている。

1. 彼は，あした　旅だつ。
2. 彼は，きのう　旅だった。
3. 彼はまだ　旅だたない。
4. 彼が　旅立てば…
5. 彼は，すでに　旅だっている。
6. 昨日　旅だった男

etc.

しかしながら，このタイプの複合動詞は極めて少ない。
複統合型言語の名詞抱合は，話者が場面場面で新しい語を作り出すことができる（Mithun 1984)のに対して，日本語のN＋V複合動詞は新しく作り出すことは難しい（生産性がない）。

多くは内部関係が認識できるが，関係が不明瞭なものも少なくない。

1．主語＋非対格動詞（NがV）の関係
芽生える，芽吹く，目覚める，色づく，色褪せる，傷つく，気づく，波立つ，波打つ，泡立つ，渦巻く，息絶える，腹立つ，元気づく，花開く

2．目的語＋他動詞（NをV）の関係
習慣づける，身構える，手間取る，名付ける，棹さす，鞭打つ，あだ為す，気遣う，年取る，腰掛ける，骨折る，陣取る，銘打つ，勇気づける，精出す

3．与格補語＋動詞（NにV）の関係
旅立つ，背負う，身ごもる，巣ごもる

4．付加詞（副詞）＋動詞の関係
つま先立つ，垣間見る，垣間見える，手まねく，上回る，下回る，したたる，遠ざかる，手渡す，爪弾く，腹ばう，手挟む

- 生産性がないことと呼応して，前部の名詞は自立できない拘束形態素になっていることが少なくない。

  垣間見る(fence.slit-see)，さかのぼる (reverse-go.up)，うな垂れる(head-droop)，途絶える(track-end)，おもむく(face-turn)

- 動詞部分が自立しない（意味が分からない）場合もある。
  目くるめく（eye-swirl)，あぶらぎる

- 一語の漢字が当てられて，もはや複合動詞と意識されないものもある。
  育む (ha ‘feather’ – gukumu ‘wrap’)，頷く (una ‘head’ – づく ‘thrust’)，躓く (tuma ‘toe nail’ – zuku ‘thrust’)，跪く (hizama ‘knee front?’ – zuku ‘attach’

**さらに，多くのN＋V複合動詞は文字通りの意味から，
別の意味に拡張している。**

1. 紐解く（書物を読む，調べる）
2. 棹さす（流れに逆らわずに進む。[話者によっては，流れに逆らう」
3. 旅立つ （あの世に行く。新しい生活を始める）
4. 息巻く（息づかい荒く，怒る）
5. 骨折る（苦労する。「骨折」の意味にはならない）

ここまでのまとめ

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

・「腰掛ける」のようなN＋V複合動詞は，一見，複統合型言語の名詞抱合と似ている。語形成の制約として，非対格動詞の主語は抱合されるが，他動詞の主語は抱合されないという点でも共通性がある。

・このように，**日本語のN＋V複合動詞と複統合型言語の名詞抱合は，形態的な側面で類似している**（Kroeber (1911): NI is *not entirely peculiar to certain types of languages* or distinctive in kind, but shares some properties with better studied types of compounds.)

★しかしながら，生産性や，名詞の非自立性，意味の変化などの点において，日本語のN＋V複合動詞は複統合型言語の名詞抱合とはかなりの相違がある。

◎ **複統合型言語の名詞抱合の動機づけ**
複統合型言語の名詞抱合は，動詞が持つagreement featuresによって動機づけられる（あるいは動詞の語彙意味構造が何らかの名詞スロットを持つ）と考えられている。
Baker, Mark (1996) Noun Incorporation is a salient feature of *polysynthetic* languages.
Van Geenhoven, Veerle (1998) *Semantic Incorporation and Indefinite Descriptions*.

この分析によれば，**日本語は目に見える形での agreement がないから，「N＋時制付きV」の複合語は少ない，**と言えるだろう。

このことは，「名詞＋形容詞」の複合語にも共通して見られる。

4．Post-syntactic Compounds と Non-finiteness

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

Post-syntactic compounds (Shibatani and Kageyama 1988，影山 1993)

家内が インターネットで チケットを 予約 の際
→ 家内が インターネットで ［**チケット：予約**］ の 際

インターネットで チケットを ご予約 のお客様は…
→ インターネットで ［**チケット：ご予約**］ のお客様は…

A. Post-syntactic compounds はそれに対応する格標示付き文構造がある。
B. この複合語は，ほとんど意識されずに，生産的に作られる。
C. Post-syntactic compounds は Verbal Noun (VN)を主要部として構成される。
D. 複合語を形成するVNは，「する」「した」などテンスを伴わないことが条件となる。VNに時制をつけると，複合語は成り立たない。
友人が チケットを 予約した 際
→ ＊友人が ［チケット：予約した］際 （助詞省略なら可能）

これからの議論では，時制を伴わない（非定形である）という性質が鍵になる。

名詞と述語(VN)の関係

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

(1) 目的語＋他動詞ＶＮ
先生が 長大論文を 執筆 の際 →先生が ［長大論文：執筆］ の際

(2) 主語＋非対格VN
磯野家に 長男が 誕生 の際 → 磯野家に［長男：誕生］の際

(3)与格補語＋移動ＶＮ
飛行機が 成田空港に 到着 の際 → 飛行機が ［成田空港：到着］ の際

(4) しかし，他動詞の主語は複合されない。
長大論文を 先生が 執筆 の際
→ ＊長大論文を ［先生：執筆］ の際

(5) 付加詞も複合されない。
先生が 長大論文を 書斎で 執筆 の際
→ ＊先生が 長大論文を ［書斎：執筆］ の際

◎ 他動詞主語と付加詞が排除されることは，post-syntactic compoundsが統語構造で作られることを示している（Baker 1988の government condition)。

問題

日本語のPost-syntactic compoundsは，複統合型言語の名詞抱合と同じだろうか？

答え

複合語内部の関係が類似していることは，名詞抱合かどうかという問題よりむしろ，統語構造における語形成の構造的な制約として捉えるべきである。

それより重要なことは，複統合型言語の名詞抱合と日本語のpost-syntactic compoundsでは，それらを駆動する要因(driving force)が異なるということである。

◎複統合型言語の名詞抱合
動詞が持つ複雑なagreement featuresが名詞抱合を引き起こす（Baker 1996）。
あるいは，動詞は，その語彙意味構造名詞の中に，抱合されるべき名詞を受け入れるスロットを元々持つ（Van Geenhoven 1998のsemantic incorporation）。

◎他方，日本語のpost-syntactic compoundsは，agreement featuresやsemantic slotによって引き起こされるとは考えられない。
むしろ，主要部であるVerbal Nounが時制を持たない（つまり名詞に近い）という性質が重要である。

Finitenessの度合いと複合語の生産性

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

仮説

日本語の「名詞＋動詞」型の複合語は，

◎時制付き（定形, finite）では生産性が低く，

◎時制を伴わない（非定形，non-finite）場合に生産性が高くなる

（時制を持たない複合語の代表は名詞＋名詞型の複合名詞）。

☞ 生産性は段階的なものであるから，finite / non-finiteの関係も二項対立(binary opposition)の関係ではなく，段階的・連続的な関係であると考えられる。

Finite
生産性低い
時制付きN＋V複合動詞

Non-finite
生産性高い
時制なしのpost-syntactic複合語

この中間に該当するのは，
どのようなタイプの複合語だろうか？

5．定形と非・定形の中間的な複合述語

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

名詞修飾節に生起するN＋V複合動詞 （このタイプは，普段あまり複合語として意識しないが，かなり見つかる）

- **特定の時間における事象の展開ではなく，被修飾名詞の永続的な特性や属性を表す。**
  - 空飛ぶ円盤
  - 道行く人
  - 風薫る季節
  - バイタリティ溢れる男性
  - 天に唾する行為
  - 金が物言う世の中

国立国語研究所
National Institute for
Japanese Language and Linguistics

これらは，もっぱら名詞修飾構文に現れる。
過去形などで文を締めくくることが難しい（各種の活用形に変化しにくい）。

笑顔あふれる小学校
＊その小学校は，いつも[笑顔あふれる]。
＊小学校は，入学式で[笑顔あふれた]。

道行く人 'passer-by'
＊大勢の人が[道行った]。

風薫る季節
＊どうも今日は，[風薫らない]なあ。

動詞部分が，もっぱらテ形 (converb)として使われるN＋V複合動詞
（このタイプも，普段は複合語として意識しないが，比較的生産的）

汗水垂らして（働く）
心して（聞く）
額に汗して （働く）
肩で風切って（歩く）
レストランの店員が 片膝ついて（注文を聞く）

その他，時制を持たない雑多な複合述語

a. N + mimetic
やる気まんまん
熱気むんむん

b. N + N ni
書類片手に
観光客相手に

c. N + deverbal N
カラヤン亡き（後）
ユル・ブリンナー形なし

★ **動詞由来名詞（動詞からの転成名詞）を主要部とする複合語**
述部が名詞化して定性がほとんどなくなると，複合語の形成は
極めて生産的になる。

・事象名詞（出来事・行為・状態）
犯人さがし
値上がり
棚上げ
恩知らず
etc.

・個物名詞（個物，属性）
爪切り
金持ち
きつつき
猫いらず
etc.

他動詞主語の複合

さらに，時制を持たない述語としてVN（Verbal Noun)が注目すべき複合語を作る。「他動詞ＶＮ」と「主語」を組み合わせた複合語（通常の統語的な名詞抱合では，普遍的に許されないパターン）が可能になる。

1. 同志社大学が 主催 の 国際学会
→［同志社大学：主催］ の 国際学会
cf. ＊［同志社大学が 主催する］ 国際学会
→ ＊［同志社大学：主催する］ 国際学会

2. スピルバーグ監督が制作 の 映画
→ ［スピルバーグ監督：制作］ の 映画
cf. スピルバーグ監督が 制作した映画
→ ＊［スピルバーグ監督：制作した］ 映画

このタイプの動作主複合は，非・定形のVNでは非常に生産的で，意味としては，被修飾名詞が持つ属性・特性を描写する「属性叙述」にあたる。（影山 2006）

類似の複合語は韓国語にあるが，中国語にはない。(影山 2010)

6．複合動詞の非対称性とfiniteness

・ 従来の研究では，V+V複合動詞ならV+V複合動詞だけ，N+V複合動詞ならN+V複合動詞だけ，というように個別の複合語のタイプに限定して研究が行われてきたが，一本一本の「木」だけを研究しても，それらを包括する「森」全体は見えてこない。

・今日の発表の新しい視点は，日本語における複合動詞・複合述語の森（システム）の全体像を見るということである。時制屈折を有する複合動詞は，あまり生産性が高くないが，特定の時制を持たないテ形ないし連体形を主要部に持つ複合語は，新しい語も比較的自由に作られやすい。さらに，時制を伴わないVerbal Nounは，極めて規則的にpost-syntactic compoundsを作る。

・そこで，「名詞＋述語」型複合語のシステムを構築するには，時制を主要な要因とする finiteness（定形）の観点が重要になる。定形・非定形という物差しの上に，複合動詞を位置づけることによって，これまで見過ごされてきた名詞＋動詞連用形の名詞化（「人さがし」のたぐい）や名詞＋名詞の複合名詞など，複合語全体の「森」がひとつの連続体として理解されるようになる。

Finitenessに関するこれまでの理論的考え方

国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

・伝統的な英語文法

(He) sings/sang.のように時制・人称・数が形態的を表す動詞がfiniteである。

・最近の生成文法

・ **Nikolaeva**, Irina. 2007. Introduction. In Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 1–19. Oxford: Oxford University Press.
Finiteness is not a matter of verb morphology; it is rather **a matter of a whole clause**.

・**Adger**, David. 2007. Three domains of finiteness: a Minimalist perspective. In Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 23–58. Oxford: Oxford University Press.

・ **Kornfilt**, Jaklin. 2007. Verbal and nominalzed finite clauses in Turkish. In Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 305–332. Oxford: Oxford University Press.

p. 305 **there is no single, discrete notion of finiteness** that corresponds in a one-to-one fashion to any single morphological or syntactic expression.

p. 305 **tense and subject case (typically nominative), or more generally "agreement" are important factors to determine finiteness**. … In languages where agreement can occur independently from tense, it is agreement rather than tense which gives rise to syntactic finiteness phenomena. the primacy of agreement over tense

Finiteとは？

国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

- **The term "finite", from the Latin *finitus*, means 'definite' or 'determined'.** (Nikolaeva 2007: 1)
- "definite, limited"というのが，動詞の形態ではなく，文全体の性質であるとすると，具体的に，文の中で何が "definite"あるいは "limited" なのだろうか？
- 生成文法では，主語のcaseとagreementが特定されている。

☞［本発表］
finitenessというのは，**文のイベント性（事象の起こり方，事象の展開のしかた）をどれほど形態的に表示するか**によって決まる段階的な概念である。段階の度合いを決める要素にはつぎのようなものが含まれる。
・時制，アスペクト，モダリティ，項の格標示，一致（主語尊敬語など），参与者の指示対象，話者のviewpoint（受身などのヴォイス）

Finite/non-finite cline

国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

Fully finite ---------- semi-finite ---------- Non-finite/pure nominal

events / states ←---------- EVENTIVE ----------→ | PROPERTY

大 ←---------- イベント性 ----------→小　属性

小 ←---------- N＋V複合語の生産性 ----------→ 大

Non-finiteness(非定性)の度合いに応じて，N＋V複合語の生産性が決まる。

・**tense domain** →
(時制付き複合動詞)　（テ形・連体形複合動詞）

・**case-marking domain** →
(時制なしの従属節における**post-syntactic comp.**)

・**agreement (S honorification) domain** →
（皇太子ご成婚のニュース）

・**voice domain** (passive/causative) →
（殴られ損，切られ役）

・ **referentiality** →
（山田さん好み，ここ止まり）

・ デキゴト性のない個物名詞（キツツキ）←→

7. 結 論

述語領域と名詞領域の非対称性

(1) V+V複合動詞
finiteな領域における述語の膠着性
動詞-補助動詞-助動詞の連鎖という膠着性の反映として，主題関係を表すものから語彙的アスペクト，さらには文法的アスペクトを表すものまで多様で，生産性が高い。

(2) N+V複合動詞
non-finiteな領域における「名詞＋述語」複合語の生産的な形成
時制付きの複合動詞は限定的であり，動詞部分がテ形，連体形，時制なしのVerbal Noun, 連用形名詞化になると，生産性が増す。

最後に，もう一度 finiteな述語に戻って，形態論的言語タイプの非対称性を再考。

・膠着型言語
動詞・補助動詞・助動詞を使って複雑な述語を作るが，時制付き動詞に名詞を取り込むことは少ない。（複数の述語を取り込むことによって，複雑な述部を一語としてふくらませる。）

・複統合型言語
述語の中に項（名詞）を取り込むことで複雑な述語を作るが，複数の動詞を取り込むことはない。（名詞を取り込むことで，命題全体を一語としてふくらませる。）

・孤立型言語
限られた語彙的複合語をのぞいて，どちらのストラテジーも採らない。

参照文献

Baker, Mark (1988) *Incorporation*. University of Chicago Press.
Baker, Mark (1996) *The Polysynthesis Parameter*. Oxford University Press.
影山太郎 (1980)『日英比較　語彙の構造』 松柏社
影山太郎 (1993)『文法と語形成』 ひつじ書房
影山太郎 (2006)「外項複合語と叙述のタイプ」，益岡・野田・森山（編）『日本語文法の新地平』 くろしお出版
Taro Kageyama (2009) *Isolate*: Japanese. In Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.) *The Oxford Handbook of Compounding*, 512–526. Oxford University Press
影山太郎 (2010)「日本語形態論における漢語の特異性」，大島弘子ほか（編）『漢語の言語学』くろしお出版
影山太郎 (2013)「語彙的複合動詞の新体系」，影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端』3–49. ひつじ書房
Kageyama, Taro (to appear) Noun-compounding and Noun-incorporation. In Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*. De Gruyter Mouton.
衣畑智秀 (2010) 「上代語の名詞抱合について」『語文』92/93: 34-44. 大阪大学
Kishimoto, Hideki and Geert Booij. 2014. Complex negative adjectives in Japanese: The relation between syntactic and morphological constructions. *Word Structure* 7: 55–87.
Kornfilt, Jaklin (2007) Verbal and nominalzed finite clauses in Turkish. In Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness*, 305–332. Oxford University Press.
Kroeber, A. L. (1911) Incorporation as a linguistic process. *American Anthropologist* 13: 577–584.
松本曜 (1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114
Mithun, Marianne (1984) The evolution of noun incorporation. *Language* 60: 847–894.
Nikolaeva, Irina. ed. (2007) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations.* Oxford University Press.
阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』 角川書店
Sapir, Edward (1911) The problem of noun incorporation in American languages. *American Anthropologist* 13: 250–282.
Shibatani, Masayoshi and Taro Kageyama (1988) Word formation in a modular theory of grammar. *Language* 64: 451–484.
Van Geenhoven, Veerle (1998) *Semantic Incorporation and Indefinite Descriptions*. CSLI.
由本陽子 (2005)『『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房